

小学校音楽科における「思考を伴った試行錯誤」による「音楽づくり」の活動
— ICT 機器を活用して「共創」を模索した試行実践（その2） —

新山王 政和* 小瀬木 崇**
*音楽教育講座 **春日井市立勝川小学校

Elementary School Music-Making Activity Utilizing the Method of “Trial and Error with Thinking” :
Trial Practice of “Co-creation” Using ICT Equipment (Part2)

Masakazu SHINZANO* Takashi KOSEGI **
*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
** KACHIGAWA Primary School, Kasugai 486-0914, Japan

要約

一連の研究では、偶然性に依拠したり機器に頼って音符並べをしたりする「音楽づくり（創作）」ではなく、まず自らが表したいイメージを定め、そのイメージに向かって IC レコーダーと鍵盤ハーモニカを用いながら音楽づくりを創意工夫する活動を模索している。そのうち南山大学附属小学校で試行した河田愛子教諭による研究授業は、愛知教育大学研究報告第 68 輯に於いて報告する。⁽¹⁾そして本報告では春日井市立勝川小学校で試行した小瀬木崇教諭による研究授業について報告するが、注目したい点は「旋律をつくる→“合いの手”に合うように旋律を手直しする」という二段階で試行錯誤を深めさせたことである。

研究授業の計画に先立ち、実践協力者には次の 5 つの条件を提示し、これを考慮してもらった。

- ①音楽づくり（創作）の活動は、音楽の諸要素と曲想との関係を感じ取る鑑賞と組み合わせて行う。
- ②IC レコーダーを用いて振り返ることで、思考を伴った試行錯誤を積み重ねながら音楽づくりを深める。
- ③2人組のペア学習、さらにペア2組で聴き直しながら対話的な活動や学び合いを深めていく。
- ④IC レコーダーの有用性と効果的な活用方法、教師による声掛けやアドバイスの効果を検証する。
- ⑤児童自らが音を出す楽器を使用し、並べた音符を PC やタブレットに演奏させる方法は用いない。

試行実践の結果、音楽づくりの活動に於いても、音楽の“よさ”に気づき自分なりの“解”を追究するために IC レコーダーが有効なツールになり得ることがわかった。しかしその効果は教師による働きかけを伴うことで発揮され、子供に持たせるだけでは十分な効果を得られないことも確認した。

キーワード： 更新される知識 思考を伴った試行錯誤 音楽科授業

keywords : updating of knowledge Trial and Error with Thinking school music class

1. 本報告の位置づけ

1. 1 研究の位置づけ

今回の一連の研究は、カワイサウンド技術・音楽振興財団の助成研究の一部として行っている。⁽²⁾実践は、南山大学附属小学校（河田愛子教諭）と春日井市立勝川小学校（小瀬木崇教諭）の協力を得て実施しており、そのうち河田教諭による研究授業については「小学校音楽科における『思考を伴った試行錯誤』による音楽づくり～ICT 機器を活用して「共創」を模索した試行実践（その1）～」(前出)で報告する。そして今回は、小瀬木崇教諭による研究授業について報告する。

1. 2 前報告において提案した事項

河田愛子教諭によって行われた実践にもとづいて、前報告では次の 9 点を提案している。今回は、その追

検証の位置づけになる。

- ①機器を用いて音符並べをして機器に演奏させた音を聞きながら“良さそうな旋律”をつくるのではなく、最初に作りたい（表したい）イメージをしっかりとたせてから音楽づくりの活動に入ることを大切にさせる。
- ②つくった旋律の試奏だけを手がかりにするのは難しいため、録音に残ったものを基にして工夫させると、思考を伴った試行錯誤に取り組みやすい。(モニタリングに有効)
- ③録音再生を振り返りながら創意工夫することができるため、自分たちで目当てを設定しながら、効率よく音楽づくりの活動を深めることができる。(リフレクションに有効)
- ④つくった児童も一緒に録音再生を聴きながらアドバイスをもらうため、他者との意見交流や共有が行いや

すく、分かりやすい（相手に伝わりやすい）。

⑤最初はよいと思っていた旋律でも、録音再生を聴くことで自分が表したいイメージと異なっていると思い直す場面が多く見られたことから、児童自身のモニタリングやリフレクションに繋がっていたと思われる。

⑥録音再生を活用することで、演奏技術や緊張からくるストレスやプレッシャーが減じるため、児童自身も安心して活動を積み上げやすくなる。（ストレスフリーに活動の足跡を残しやすい）

⑦旋律の出来栄だけを総括的に評価するのではなく、録音再生を通じたモニタリングとリフレクションにより活動のプロセスを形成的に診断することができていた。（自己評価が次の課題設定へと繋がる）

⑧児童の主體的な学びを求めるためには、教師から積極的に声を掛けたり、敢えて否定的に問い掛けたりすることが有効であった。さらに適宜知識や技能に関するサポートを行うことが、その効果を高めていた。

⑨今後は、より長い旋律をつくる活動へと繋げる方策や、「音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み」を生かした音楽づくりの活動へと発展させる方策を模索することが求められる。

2. 筆者が重視している現代的な教育課題

今回の一連の研究で筆者が特に重視している現代的な教育課題について、簡単に触れておく。前報告と重複するが、要点に絞って記しておきたい。

2. 1 「生きた知識」

平成 29 年に告示された文部科学省の学習指導要領は、「生きた知識（更新される知識）」が基盤になっている。筆者は、これを「既知の知識を自分なりに整理し（構造化）、それらの意味や働き、効果などを考えたり体感したりすることで、自分なりの嗜好や価値観へと高めていき（再構築）、さらに様々な体験や活動を通じて考えたり確かめたりすることで、自分自身の捉え方が間違っていないか、他の考え方は無いのか、自分なりの価値観に齟齬や矛盾は無いのか等を、思考を伴った試行錯誤によって確認し、知識をより強固なものとして更新していくものである」と考えている。

また国立教育政策研究所教科調査官の臼井学氏は、「知識」について次の4つのレベルに分けてわかりやすく説明している。氏の講演から筆者が要点を抜粋整理する形で紹介したい。⁽³⁾

①覚えればわかる知識（用語、エピソードなど）：本やテキスト、教師の指導など、外から入ってくるもの。頭の中で自然にひらめくことはない。

②聴き取ることによってわかる知識（音楽を形づくっている要素やその変化など）：音に関わらせた活動の中で気づき、聴き取ることによって理解できる。

③感じ取ることによってわかる知識（音楽を形づくっている要素やその変化と曲想のかかわりなど）：「テンポが少しずつ遅くなったから、落ち着いた感じがした」などのように、要素と曲想との関わりを感じ取ることによって理解できる。

④学習過程を経てわかる知識（「知っているだけ」とは異なる知識）：活動の過程を通して子ども自身が知識と知識を結び付けたり繋ぎ合わせたりすることで、自分なりの理解へ高めることができる。

この④として示された知識の捉えこそが、筆者の言う「構造化、再構築・更新される知識」である。

2. 2 批判的思考や Active Learning との関係

一連の研究では「音楽的に自己を客観視し、自分なりの“解”に向けた課題を見つける力」と「課題解決に向けて思考を伴った試行錯誤を繰り返して、創意工夫を重ねることのできる力」の育成を目指しているが、これらは「自分自身の考えに対して批判的に向き合う批判的思考」や、「主體的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」にも繋がるものである。よって、偶然性だけに頼った音楽づくりではなく、思考を伴った試行錯誤のプロセスによって得られる知識や技術の裏付けを伴った創意工夫を追求したい。

2. 3 新しい小学校学習指導要領音楽編との関係

①小学校音楽科の教科目標

『文部科学省 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編』では、音楽科の目標が「第 2 章第 1 節（p.9）」に於いて次のように示されている。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。

(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。

(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

これらを鑑みると、音楽の活動とは表現と鑑賞が一体化して行われるものであり、そこでは「音楽の構造（音楽を形づくっている要素の表れ方や、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり合い：p.89）」と、それによって醸し出される「曲想（その音楽に固有の雰囲気や表情、味わい）」の変化に気づき感じ取るとともに、それを表現するために必要な技能を身に付けたり、

その表現方法を工夫したり、自分なりに味わって聴くことができるようにしたりすることが求められている。その際「音楽的な見方・考え方 (p. 10)」で示されているとおり、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えて、自己のイメージへと結び付けるようにしなければならない。今回の試行では、「鑑賞で、音楽構成要素が生み出す曲想の変化に注目する」→「先に表したいイメージを固めてから、それを表す旋律づくりを行う」→さらに「思考を伴った試行錯誤を通して、表したいイメージに沿った旋律づくりの創意工夫を重ねていく」の3段階の活動の流れを特に重視した。

②活動のプロセスを重視する

新しい学習指導要領では、活動の結果ではなくプロセスが重視されている。例えば、A表現「(3)音楽づくり」では、「ア(イ)どのように音を音楽にしていくなか～略～(低学年) p. 154」「ア(イ)音を音楽に構成することを通して～略～(中学年 p. 155、高学年 p. 157)」とあるように、出来上がった作品を総括的に評価するのではなく、作っていくプロセスを大切に形成的に評価することを求めている。よって本研究でも、児童が自ら鍵盤ハーモニカを用いて試行錯誤しながら“音を旋律へと紡いでいく活動”をめざしている。

2. 4 筆者のスタンスと一連の研究の目的

筆者の先行研究では、イメージングや思考を伴った活動をコアにして表現と鑑賞が一体となった活動を行うことで、様々な音楽構成要素に気付いて感じ取り、その働きや効果を知り、それを操る技や方法を身に付け、表現や聴き方を改善したいと感じるようになることを明らかにした。具体的には、音の繋がり方(メロディー)や音の重なり方(ハーモニー)、音の並び方(リズム)から形づくられる音楽のよさ(良さ、佳さ、善さ)や、組み合わせの違いから生まれる微妙な響きの変化を聴き取ったり、そこから生まれる曲想や雰囲気の違いを意識して感受したりすることで、自ら音や音楽へ向かっていくような「能動的に音楽と向き合う活動」について、表現と鑑賞の両面からアプローチすることが効果的であることを確認している。(4)

これに基づき本研究では音楽づくりの活動でも ICレコーダーが音楽の“よさ”や“うつくしさ”へ気付くのに有効であり、自分なりの“解”を追究する「思考・判断」へ結び付くことを明らかにしたい。そして児童が自らの活動を冷静に振り返って思考を伴った試行錯誤を繰り返すことで創意工夫を深め、音楽づくりに関する知識を自分なりに構造化、再構築・更新していけることを確認したい。

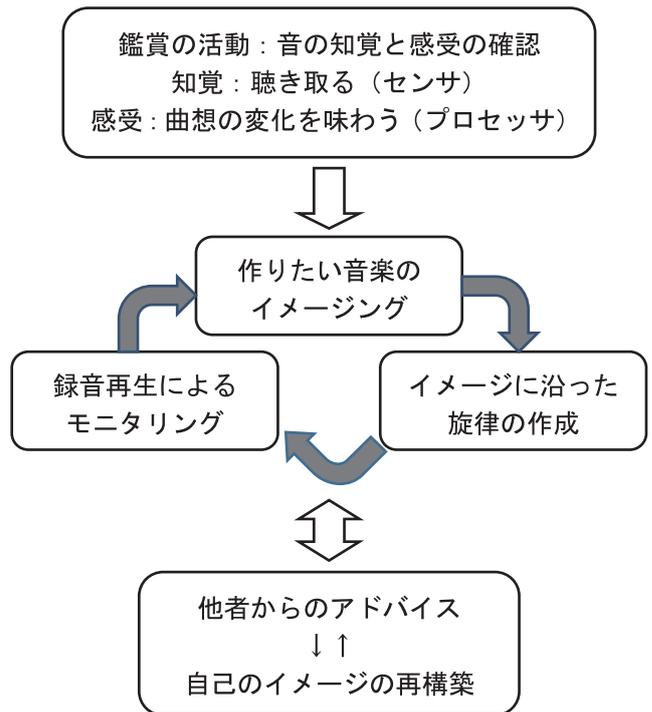
4. 試行実践における活動モデルの措定

前章までに述べたことを鑑みて、本研究における活動モデルを次の3段階に措定した上で、各活動の関係

をモデル図に整理している。

- ①「鑑賞」と「音楽づくり」の活動を一体化させる。この第1段階では、鑑賞によって音楽の構造と曲想の変化の關係に気付いて(知覚)、そこから雰囲気の違いや変化を感じとる(感受)。
- ②第2段階では、作りたい(表したい)ことをきちんとイメージングしてから、それを表す音楽づくりの活動に取り組む。その際、次の2点に留意する。
 - ・音楽的に自己を客観視し、自分なりの「解」やそれに向けた「方略」を見つけ出す。見つけ出した「解」や「方略」が適切であるかどうか、ICレコーダーを活用して繰り返しモニタリングする。
 - ・ICレコーダーを用いて作った作品をモニタリングすることで、よりよい音楽づくりに向けて思考を伴った試行錯誤を繰り返す。これを重ねることで、自ら創意工夫を深めていく。
- ③第3段階では、作った作品をより客観的に評価するために他者とアドバイスを交換することで、冷静な創意工夫の着眼点を得る。(リフレクション)

[今回の試行実践で措定した活動モデル]



5. 試行実践の概要

5. 1 筆者から実践協力者へ依頼したポイント

- ①音楽づくりの前に鑑賞の活動を行い、音や音楽を形づくっている要素に気付き(知覚)、諸要素と曲想との關係を感じ取って味わう活動を行う。(感受)
- ②ICレコーダーを介在させて思考を伴った試行錯誤を積み重ねる。(作った旋律にこだわる)

③最初に2人組のペア学習で何度も聴き直ししながら創意工夫し、さらにペア2組で聴き直しながらグループ内での対話的な学び合いを深めていく。(他者の価値観との対比)

④ICレコーダーの有用性と効果的な活用方法、教師による声掛けやアドバイスの効果を検証する。

⑤児童自らが音を出す楽器(今回は鍵盤ハーモニカ)を使用し、タブレットやPCなどの並べた音符を機器が奏でてくれるものは使用しない。

5. 2 協力者による試行実践の概要

今回、試行実践の協力を得た小瀬木教諭と河田教諭による研究授業の大まかな内容は次のとおりである。

①春日井市立勝川小学校4年生(小瀬木崇教諭)

「ソーラン節」「南部牛追い歌」「谷茶前」「島唄」の鑑賞によってリズムや旋律の特徴を感じ取らせた後、沖縄の音楽の構成音を用いて音楽づくりを行わせた。次に“合いの手”に合うように、リズムや旋律をさらに工夫させた。次章以降で報告している。

②南山大学附属小学校5年生(河田愛子教諭)

動物の様子や雰囲気と音の高さ・リズム・強弱の関係に注目して「動物の謝肉祭」を鑑賞した後、それらの要素を工夫して動作を表す音楽づくりを行った。ここで注目すべき点は、「動物を表す音楽」ではなく、「動物の動作を表現する音楽」をつくらせることで、工夫する視点を「静止画を動画へ」のように明確にし、創意工夫を深めさせていたことである。

6. 小瀬木崇教諭による春日井市立勝川小学校における小学校4年生を対象にした研究授業の概要

実践者の小瀬木教諭が作成した指導計画を、筆者が書式を整えた上で紹介する。ここで注目すべき点は、自作品に対する“こだわり”の心をもたせて創意工夫を重ねさせるために「旋律をつくる→“合いの手”を意識して、それに合うように旋律を手直しする」という二段階で試行錯誤を重ねさせていたことである。

「第4学年音楽科学習指導案」

指導者 小瀬木崇(2017年12月実施)

6. 1 題材名 「日本の音楽に親しもう」

6. 2 目標

①郷土の音楽とその特徴に関心を持ち、楽曲の特徴に気付いて聴いたり演奏したりする。

②郷土の音楽の旋律の特徴を感じ取って曲想にふさわしい歌い方を工夫したり、旋律づくりの音の組み合わせを工夫したりする。

③郷土の音楽の歌声やリズム、旋律などの特徴の違いに気付く、曲想の表れ方のちがいを感じ取る。

④郷土の音楽にふさわしいリズムや音の組み合わせの

旋律を考える。

6. 3 指導計画(6時間完了)

(第1段階)日本民謡を聴いて、歌声やリズム、旋律などの特徴に気付く、曲想の表れ方のちがいを感じ取る。

①「ソーラン節」や「南部牛追い歌」を聴いて、歌声やリズム、旋律などの特徴に気付く。これまで習ってきた歌を思い出しながら、日本民謡とのちがいを感じ取る。

[活動の意図]

・手拍子を打ったり旋律の動きを線で表わしたりしながら音源に合わせて口ずさむことで、拍ののったリズムと拍のない自由なリズムのちがいに気付く、そのよさを感じ取る。

・皮の打楽器、木の打楽器、金属の打楽器などを自由に組み合わせる伴奏を工夫し、音色が異なる打楽器によるリズム創作を体験することで、曲の雰囲気より深く味わい、曲の特徴を感じ取る。

②「谷茶前」を聴いて、歌声やリズム、旋律などの特徴に気付く。「ソーラン節」や「南部牛追い歌」を思い出しながら、沖縄の音楽との違いを感じ取る。

[活動の意図]

・5つの音でできた旋律が沖縄の音楽らしさを醸し出していることに気付く、その曲想を感じ取る。

③「島唄」を歌ったり聴いたりして、歌声やリズム、旋律などの特徴に気付く。それぞれの音楽の特徴と曲想の表れ方の違いを感じ取る。

[活動の意図] 同上

(第2段階)沖縄民謡で使われている5つの音を使って旋律をつくる。

④沖縄の音楽が「ドミファソシ」の5つの音を用いてつくられていることを紹介した後、鍵盤ハーモニカを用いて各自で2小節の旋律をつくる。ICレコーダーに録音して、自分なりに工夫を重ねる。

[活動の意図]

・リズム譜が記された音符カードを用いながら5つの音を使った4/4拍子2小節の旋律づくりを体験する。
・鍵盤ハーモニカで音を出しながら試行錯誤し、気に入った旋律を見つける。

⑤ペアで旋律を繋げて4小節の旋律にする。ICレコーダーで録音することで、繋がりやすい旋律を工夫する。

[活動の意図]

・ペアになり、つくった旋律の「まねっこあそび」をして、旋律の繋ぎ方や変化のさせ方を工夫する。

・ICレコーダーを用いて、自分たちの作りたい曲想になっているか、耳で聴いて確かめながら試行錯誤する。
・ICレコーダーに録音した旋律をもう一組のペアに聴いてもらい、意見やアドバイスを交換する。

⑥（本時：練り直し）沖縄音楽の特徴の一つに合いの手が入っていることを確認した後、合いの手に合う旋律のつながりになるように工夫する

〔活動の意図〕

- ・つくった旋律に掛け声を入れてみて、沖縄の音楽らしさを表した旋律になるように工夫する。
- ・ICレコーダーを用いて、自分たちの作りたい曲想になっているか、耳で聴いて確かめながら試行錯誤する。
- ・ICレコーダーに録音した旋律をもう一組のペアに聴いてもらい、意見やアドバイスを交換する。
- ・ICレコーダーに録音した旋律を全体で発表して、旋律のつくり方や工夫の仕方について意見を出し合う。

6. 4 本時の指導（第6時）

〔目標〕

- ①合いの手を入れる音楽づくりに興味・関心をもち、旋律のつながり方を考える。
- ②旋律のリズムやその反復、変化などを聴き取り、音のつながり方などを工夫する。

〔教材〕

- ①「島唄」の音源
- ②「合いの手」の種類を表した拡大図
- ③「旋律のつながり方」を表した拡大図
- ④プロジェクター
- ⑤ICレコーダー（2人に1台ずつ）
- ⑥カホン（演奏する時に拍をとるために使用）

〔本時の活動の流れ〕

- ①学習の雰囲気をつくる：ボイストレーニングの後、「島唄」を歌う。
 - ・教師が歌の途中で合いの手を入れて、合いの手に気付けて、そのよさを意識させる。
- ②本時の目標を確認する。：「合いの手」が似合う沖縄音楽に仕上げよう。
 - ・「スイサーサ」、「イーヤサーサ」の合いの手の例を知る。
 - ・実際に合いの手が入っている演奏を聴かせる。
 - ・自分たちのつくった旋律の2小節目・4小節目に合いの手を入れることを、図を用いて確認する。
 - ・参考音源に合わせて2種類の合いの手を練習し、合いの手の入れ方に慣れる。
 - ・全員で教師の演奏に合わせて、実際に合いの手を入れてみる。
- ③ペアでつなげた旋律に合いの手を入れる。
 - ・自分達が作った旋律を録音して、それに合わせて合いの手を試してみる。
 - ・合いの手を入れやすいように、旋律を工夫する（cf：「スイサーサ」は休符があった方がよい。「スイサーサ」は音が上がる方が合う。「イーヤサーサ」は同じリズム

が合う。「イーヤサーサ」は音が下がっていく方が合いやすい、など）

④ペアごとに発表する。

- ・演奏し、ICレコーダーで確認しながら旋律を工夫するように促す。
- ・合いの手を入れにくいなら、旋律をどのように工夫すればよいかを考えるように促す。
- ・短い合いの手（裏拍の「スイ」）も試すように促す。
- ・音量や音の高さにも耳を傾かせて、曲の最後になるにつれて曲想が盛り上がることに気づかせる。
- ・教師がカホンでリズムパターンを演奏して、拍を意識させる。

⑤工夫したことをワークシートに記入する。

- ・どんなことを考えながら旋律のつながり方を工夫したのかメモするように促す。

以上が実践者の小瀬木教諭から示された指導案（試行実践計画）の概略を、筆者がまとめたものである。

6. 5 授業記録（筆者のテープ起こしによる）

授業者が音楽づくりの活動の導入として行った“創意工夫のやり方”をクラス全体で共有共通理解化する部分について、筆者の文字化により紹介したい。

〔合いの手と旋律の関係を、歌うことで体感する〕

○児童（歌唱）

○T 途中で先生が変なかけ声入れたでしょう。聞こえた人。はい。何て言ってた。

○児童 スイサーサ。

○T あ、そうそう。こういう先生が入れたかけ声みたいのって何て言うか知ってる。

○児童 合いの手。

○T お、何てって言ったの。何て言ったの。

○児童 合いの手。

○T そうそう。今日勉強する合いの手。合いの手が入った本当の歌ね。どこに入ってるかね。

○（音源）

○T こういう曲あるけど聞こえた、今の。合いの手。どんな言葉が入ってたかっていうと、ここら辺にイーヤサーサ。で、ここら辺にスイサーサ。ちょっとやってみるよ。まねしてみて、聞こえてきた合いの手。

○（音源）でも誰より誰よりも知っている悲しいときもうれしいときも何度も見上げていたこの空を。

（児童）イーヤサーサ

○T そうそう、そうそう。

○（音源）教科書に書いてあることだけじゃ分らない。スイサーサ。大切なものがきっとここにあるはずさ。（児童）「スイサーサ」

○T そうそう。タイミング分かったしょう。沖縄の人たちはもっともっとやる。イーヤサーサって。ちょ

っと元気よくやってみるか。タイミング分かったよね。
○（音源） 誰よりも知っている悲しいときもうれしいときも何度も見上げていたこの空を。（児童）「イーヤサーサ」

○（音源） 教科書に書いてあることだけじゃ分からない大切なものがきっとここにあるはずさ。（児童）「スイサーサ」

○T というのが合いの手ね。合いの手。今日はこの合いの手をみんなが考えてくれた節ね、沖縄風のメロディあるでしょ。あれにあてはめる。で、これはねちょっと今ゆっくりだったのうまく入らないので、ちょっと変えてこういうふうに入ると多分合いの手入りやすい。スイサーサとイーヤサーサのこの2種類だけちょっと入れて。言ってみようか。1、2、3、スイサーサ、1、2、3、スイサーサ。1、2、はい。

○児童 スイサーサ。

○T 1、2、3、4、5、6、7まで、1、2、3、4、5、6まで休んで1、2、イーヤサーサ。

○児童 イーヤサーサ。

○T 1、2、3、4、5、6。

○児童 イーヤサーサ。

○T そうそう。これにこの前の節を付けてみるよ。

○教師 こんな感じで自分が作ったのに今のあてはめてみて。この前作った節を覚えてるかな。覚えてない人もいると思うけど。この間みんなが作ってくれた節の中でちょっと試しに合いの手をやってみて。

[児童がつくった旋律で試してみる]

○T 聴こえた？これ誰のかわらんよ。誰のかわらんよ。ちょっとこれに合わせてみるよ。いい。

（音源）

○児童分かんない。

○T もう一回。スイサーサ入れてみて頑張る。

（音源）

○T はい。

○児童 スイサーサー

○児童 スイサーサー

○児童 イーヤサーサー

○T こんな感じ。こんな感じで入れて。で、今どう思った。今どう思った。

○児童 入りにくい。

○T 入りにくい。いいね。その感覚ね、すてき。入りやすい合いの手がやっぱり似合うんだよね。

[創意工夫の仕方を例示する]

T 今日の目標はこれね。合いの手が似合う沖縄風のメロディを作ってほしい。入りやすけりゃいいよね。それをもう一回組み直してもらってもいいし、前に作ったのでよさそうだなと思ったらそれはそれでいい。で、くっつけ方3種類ありました。交互につなげるパ

ターン。そして隣どうしのAさんBさんと交互につなげるパターン。で、真ん中に2回連続して後半につなげるパターン。3パターン目。最初と最後だけ同じ人で真ん中歌い続ける。どのパターンでもいいし前やったパターンがそのままできるならそのまんまやって。注意してほしいのは最後の人、最後の人ほどかみか高いで終わる。そうすると終わった感じがする。

まずやること。フレーズもう一回練り直してね。もう一回練り直すってことは前のがよさそうだったらそれはそれでいい。できた。考えた。その次。録音してみます。録音やり方覚えてるよね。で、ここで次に合いの手入れてみる。今やってみたいに流しながら2人でスイサーサとか言ってみる。そうするといいかどうか分かるでしょう。で、ここで考えてみます。いいかな。似合うかな。で、またここに帰ってくる。

[活動の途中で全体へアドバイスする]

○T そうすると何となく音楽っぽくなるという感じかな。いいね、それねすごく大事ね。はい、見て。音楽の仕組みとして音楽のつなげ方で3種類あるんだよね。反復っていうのが繰り返す。で、問いとこたえてのはもう文字どおり問いかけと応え。で、変化っていうのはどんどん変えて返していく。この1番と2番のどっちかを使うと音楽っぽくなる。そこに何となく気づいたと。いいじゃない。これ実はやってたよっていう人も、ちょっと意識して作ってみようか。組み立ててみよう。はい、続きどうぞ。

[ペアで発表させた後で全体へアドバイスする]

○T ああいい感じだ。あの2組ともつなぎ方ね、最初のところは問いとこたえを使っていますね。で、次のところは反復を使っています。そしてその後は変化させていくような。こういうので工夫ができるとベリーグッド。最初何か工夫して自分たちも変えたよね。なかなか難しかったね。（以下、授業のまとめの場面）

以上、注目すべき場面ごとに筆者が区切ってコメントを付しているとおおり、次の5点のような工夫によって児童に気付かせ、思考を伴った試行錯誤を重ねるように促し続けていることに注目したい。

①前時までの鑑賞で味わってきた音楽の諸要素と曲想の関係を思い出せて、さらに前時に鑑賞した沖縄の音楽の雰囲気に取りながら、全員で歌うことを通じて合いの手を体感させている。

②児童の作品例を取り挙げて、合いの手を入れやすい旋律とそうでない旋律があることに気付かせている。

③合いの手に合う旋律の例を全体へ説明した上で、児童の作品例を取り挙げてそれを改善していく方法や練り直していくやり方を示している。

④「反復」や「変化」など、これまでに学習してきた

「音楽の仕組み」と結びつけながら、思考・判断を深めるように促している。

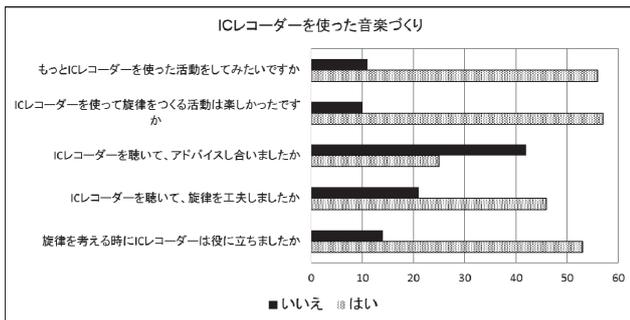
⑤ペアで考えたりグループで工夫したりしたことを評価し、話し合いの過程で改善したことを認めている。

7. 研究授業の分析と考察

7. 1 実践後に児童へ行ったアンケートの分析

まず IC レコーダーを用いたクラスの結果を整理し、筆者による所感を記したい。

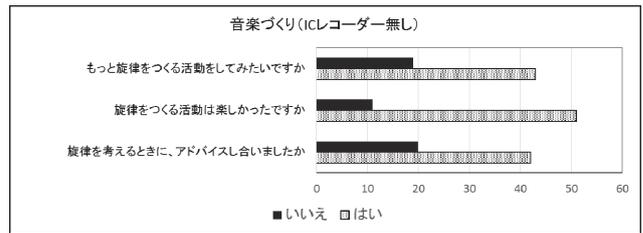
ICレコーダーあり	はい	いいえ
旋律を考える時にICレコーダーは役に立ちましたか	53	14
ICレコーダーを聴いて、旋律を工夫しましたか	46	21
ICレコーダーを聴いて、アドバイスし合いましたか	25	42
ICレコーダーを使って旋律をつくる活動は楽しかったですか	57	10
もっとICレコーダーを使った活動をしてみたいです	56	11



項目3「ICレコーダーを聴いてアドバイスし合いましたか」に「はい」答えた児童は「いいえ」と答えた児童の2/3しかおらず、ICレコーダーの再生を聴きながら意見交換した児童は多くないことが分かる。しかし項目1「旋律を考える時にICレコーダーは役に立ちましたか」に「はい」と答えた児童が「いいえ」と答えた児童の4倍近くもおり、また項目2「ICレコーダーを聴いて、旋律を工夫しましたか」に「はい」と答えた児童が「いいえ」と答えた児童の2倍以上もいることを合わせ鑑みると、必ずしもICレコーダーが思考を伴った試行錯誤に役立たなかったとは考えにくい。さらに項目4「ICレコーダーを使って旋律をつくる活動は楽しかったですか」と項目5「もっとICレコーダーを使った活動をしてみたいです」について、共に「はい」と答えた児童が「いいえ」と答えた児童の5倍以上いたことを考えると、項目3の「ICレコーダーを聴いてアドバイスし合いましたか」の回答とは、教師が活動前や活動の途中に「さっきのを〇〇したらもっと□□になる」等のように即時その場でアドバイスしていたのと同じように、ICレコーダーから流れてくる旋律を聴きながらリアルタイムに意見交換するという高いレベルの作業ができなかったと回答しているものと推察できる。

次にICレコーダーを用いていないクラスの結果を整理し、筆者による所感を記したい。

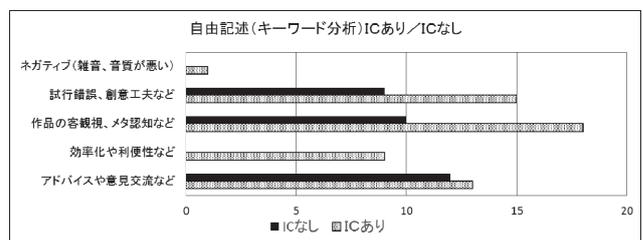
ICレコーダー無し	はい	いいえ
旋律を考えるときに、アドバイスし合いましたか	42	20
旋律をつくる活動は楽しかったですか	51	11
もっと旋律をつくる活動をしてみたいです	43	19



項目2「旋律をつくる活動は楽しかったですか」に「はい」と答えた児童が「いいえ」と答えた児童の5倍近くもいたのに、項目3「もっと旋律をつくる活動をしてみたいです」に「はい」と答えた児童は「いいえ」と答えた児童の2倍程度しかいなかったことに注目したい。つまり「楽しかった」と答えている児童の中から、「もっとしてみたい」という児童が目減りしていることになる。しかし、項目1「旋律を考えるときに、アドバイスをし合いましたか」に「はい」と答えた児童は、「いいえ」と答えた児童の2倍もおり、これはICレコーダーを用いたクラスの結果よりも多い。ICレコーダーが無くても、児童は協働を行うことができていたことに注目したい。

7. 2 児童の自由記述の分析

自由記述欄に記された文章からキーワードをカテゴリ化して、その頻出度をグラフ化している。グレーの横棒がICレコーダーを用いたクラスの結果を示しており、黒の横棒がICレコーダーを使用していないクラスの結果を示している。実際に比較ができるのは、項目2「試行錯誤、創意工夫など」に関する記述と、項目3「作品の客観視、メタ認知など」に関する記述、そして項目5「アドバイスや意見交換など」に関する記述の頻出度合である。



これによると、項目2「試行錯誤、創意工夫など」と、項目3「作品の客観視、メタ認知など」については、ICレコーダーを用いたクラスの結果の方が、ICレコーダーを用いていないクラスの結果の2倍近くも各項目に関連する記述は多いことが分かる。つまり、音楽づくりの活動に於いてICレコーダーが「試行錯誤、創意工夫、作品の客観視、メタ認知」のために役に立ったと、児童は感じていたことになる。

他方、項目5「アドバイスや意見交換」については、

ICレコーダーの有無による際はほとんど見られない。前述した「はい」「いいえ」による二者択一アンケートではICレコーダーを用いていないクラスの方が肯定的回答は多く、自由記述になると逆転してICレコーダーを用いたクラスの方が肯定的な記述は多くなっていたことから、両者の差はほとんど認められないと考えるのが妥当であろう。

7. 3 実践後アンケートに基づく考察

今回の実践に関するアンケート結果を整理して、次の3点にまとめる。

- ①音楽づくりをする際、ICレコーダーは試行錯誤を繰り返したり創意工夫を重ねたりする際に有効である。
- ②ICレコーダーは、自分の作った旋律を客観的に聴いたり、メタ認知的に自分の作品と向き合ったりする際にも有効である。
- ③ただしICレコーダーだけが児童の協働へ直接寄与することは無く、それを用いるだけで子供同士のアドバイスや意見交流が活発になるという訳ではない。活動へ入る前に教師がアドバイスの仕方や意見の交流の仕方などをモデルとして示しておくことや、活動の途中でも創意工夫の方法などをモデルとして示すことが大切である。

本報告の小瀬木教諭による試行と前報告の河田教諭による試行では、ともに授業の早い段階でアドバイス交換や意見交流の「やり方・方法」をクラス全体に向けて示しており、小瀬木教諭は活動の途中でも必要に応じてそれを示している。これらのことから、表現(歌唱・器楽)の活動に於いて演奏表現の工夫の仕方のサンプルを児童へ示すことが重要であるのと同じように、また鑑賞の活動でも「聴き方」や「感じとったことの表現の仕方」などを例示することが重要であるのと同様、音楽づくりの活動に於いても「やり方や方法を先に紹介しておく」ということが大切なポイントになるであろう。

8. 今後に向けた新たな課題や留意点

①活動の結果ではなくプロセスを重視する

音楽に関する「知識」を単に暗記し知っているだけのものに止めることなく、「自分なりに整理する(構造化)→自分なりに捉え直す(再構築)→新しい見方や考えをもつ(更新)」と位置付ける以上、活動の結果だけを評価する総括的評価ではなく、活動のプロセスを診断する形成的評価を活用すべきである。

さらに技能や知識とは、身に付けたり覚えたりさせることが目的ではなく、それを活用したりさらに探求を重ねさせることが目的である。そして授業は、知識や技能の習得だけを目指す場ではなく、「試しながら考えて、アドバイスをもらう場」にしたい。

②「思いや意図」には「手段」も含めて考える

既に児童は「思い=こうしたい」「意図=なんのために？」を考えることはほぼ達成されているが、「思いや意図」のようにワンワードでとらえる場合には、楽曲構造と曲想とのかかわりを踏まえた「どうやって(手段)」も含めて考えさせたい。

③子供の中で音を伴って思考が熟していたか？

単に音や音符を並べただけの活動に陥ることなく、音の羅列が意味をもつ音楽として子供の中で絶えず鳴り響いているような活動を大切にしたい。

④「習得-活用-探求」を活性化する

多くの音楽活動は、「この授業で初めて体験する」ということは少なく、ほぼ「探求」から始まることが多い。よって「探求→それに必要なスキルや知識の習得→習得したものを使ってみたくなる」→「活用する内によりよいものをめざしてさらに探求が深まる」のように、ステージを上げながら活動が深まり続ける「学びのサイクル」を活性化させたい。

⑤思考判断をめぐらす活動と結果を表現する活動

児童が思考判断をめぐらす活動と、その結果を表現し合う活動のバランスをとり、④の「学びのサイクル」が活性化するように適宜・適切に設定する。

以上の5点が今後検討してみたい課題である。

おわりに

今回の一連の研究では、偶然性に依拠したり機器に頼って音符並べをしたりする音楽づくりの活動から離れ、子供にとって身近なICレコーダーと鍵盤ハーモニカを用いて、自らが抱いたイメージに向かって音楽づくりを創意工夫していく活動の有効性を検証した。ここでは録音再生を繰り返し聴いたり、録音再生を基にして他者からアドバイスをもらったりしながら、自分が表したいイメージに少しずつ近づいていく練り直しを、思考を伴った試行錯誤によって深めることができていたと言えよう。しかしながら、ICレコーダーを子供へ持たせただけで意見交流や協働が活発になる訳ではなく、「方法」や「やり方」などを早い時期にモデルとして示すとともに、活動の途中でも必要に応じてそれに触れて思い出させることが大切であろう。つまり教師の働きかけを伴うことによってICレコーダーの有効性が発揮されることを確認した。

特に前報告で取り挙げた河田教諭の試行実践では、「動物を表す音楽」ではなく、「動物の動作を表現する音楽」をつくらせることで、創意工夫を深めさせていた点に注目したい。また本報告で取り挙げた小瀬木教諭の試行実践では、「旋律をつくる→合いの手に合うように旋律を手直しする」という二段階で子供へ試行錯誤を繰り返させていた点に注目している。

最後になったが、多忙な中、約半年に亘り準備を整えた上で貴重な研究授業を提供して下さった小瀬木崇教諭と河田愛子教諭へ心より感謝している。また快く

ご協力をいただいた両小学校の関係者にも、深く謝意を表したい。

[注]

- (1) 愛知教育大学研究報告第 68 輯 (2019 年春に発刊予定) に、同研究「その 1」として掲載予定。
- (2) 一般社団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団「研究の推進及び人材の育成のために行う研究助成事業」による助成研究に於いて、2017 年度助成「小中学校教員と連携して開発する音楽科授業における ICT 機器を活用した Active Learning のモデルプラン～IC レコーダーを『音楽の鏡』として、『気づく・感じ取る・比べる・考える・まとめる・伝える活動』により音楽的自立をめざす活動～」に認定、助成を受けている。
- (3) 臼井学 (初等中等教育局教育課程課教科調査官・国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官) が、平成 30 年度愛知県音楽教育研究会 (2018 年 8 月、名古屋市熱田文化会館) において行った講演資料、および筆者による聴講メモより。
- (4) 関連する筆者の先行研究は次のとおり。
 - ・科学研究費助成事業 (2011～2013) 基盤 C:23531248、「小中学校教員と共同開発する言語活動で表現と鑑賞を一体化させる音楽科授業プラン」
 - ・コニカミノルタ&コニカミノルタ・テクノロジーセンター研究奨学金 (2004)、「学校音楽教育の授業実践におけるイメージ形成力の発達をめざした試み」
 - ・「次期学習指導要領の構造化され再構築・更新される知識に注目した小学校音楽科の実践的一考察」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第 2 号、pp. 117-124、2017
 - ・「文部科学省学習指導要領改訂の動向と音楽科をめぐる議論の整理」愛知教育大学研究報告第 67 輯、pp. 1-9、2017
 - ・「自己評価シートの工夫により生徒の内発的思考の活性化を目指した合唱活動の試行」愛知教育大学研究報告第 66 輯、pp. 1-10、2016
 - ・「気づく・感じ取る・比べる・考える・まとめる・伝える、鑑賞は音楽科授業における Active Learning」音楽鑑賞振興財団『音楽鑑賞教育 Vol. 22』、pp. 54-57、2015
 - ・「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした授業実践Ⅱ」愛知教育大学

教育実践開発機構紀要第 3 号、pp. 87-96、2013

- ・「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした実践Ⅰ」愛知教育大学研究報告第 62 輯、pp. 1-9、2013
- ・「言語活動を触媒として表現と鑑賞を活発化させる授業の模索」全日本音楽教育研究会大学部会 H23 年度会誌、pp. 22-28、2012
- ・「音楽の諸要素と向き合わせることをめざした新しい視点からの学習指導案モデルの開発」愛知教育大学研究報告第 59 輯、pp. 1-10、2010
- ・「音楽の諸要素へ耳を傾け、それを聴き取る音楽活動の試み」愛知教育大学教育実践総合センター紀要第 12 号、pp. 307-314、2009
- ・「音楽の諸要素へ耳を傾け、根拠や理由を付して考えそれを他者と共有する音楽活動」、愛知教育大学研究報告第 58 輯、pp. 1-10、2009
- ・「聴取の意識を音の羅列から意味のある音の結びつきへ転換させる能動型鑑賞活動への試み」愛知教育大学研究報告第 57 輯、pp. 1-10、2008

[参考引用文献]

- * 森敏昭・岡直樹・中篠和光著『学習心理学—理論と実践の統合をめざして—』、培風堂、2011
- * 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』、(株)東洋館出版社、2018
- * 『小学校 新学習指導要領の展開』、明治図書、2017
- * 『平成 29 年改訂 小学校教育課程実践講座 音楽』、ぎょうせい、2018
- * 『はじめて学ぶ教科教育 初等音楽科教育』、ミネルヴァ書房、2018
- * 『最新 初等科音楽教育法 [改訂版] 小学校教員養成課程用』、音楽之友社、2018
- * 拙著『改訂版 新しい視点で音楽科授業を創る!』(株)スタイルノート、2011

なお今回の試行実践で措定した活動モデルを考案する際に次の文献を参考にしている。

- * B. J. ジーマン、D. H. シャンク編著、塚野州一編訳、『自己調整学習の理論』、北大路書房、2006
- * B. J. ジーマン、S. ボナー、R. コック著、塚野州一・牧野美知子訳『自己調整学習の指導—学習スキルと自己効力感を高める—』、北大路書房、2008